

# かたりべ47

豊島区立郷土資料館だより

## 甦よみがえる中世豊島氏

今秋から来年にかけて豊島区教育委員会・北区・板橋区教育委員会では、共同企画「豊島氏とその時代」を開催いたします。区名と同じ豊島を冠する豊島氏は、平安時代から太田



上：平塚神社縁起絵巻・北区平塚神社所蔵  
左：豊島清光像・北区清光寺所蔵

道灌に滅ぼされる室町時代まで、現在の豊島区・北区・板橋区・練馬区など、かつての武蔵国豊島郡西部に大きな勢力を築いていた有名な中世武士団です。豊島氏についてはこれまででも多くの方々に興味を持たれ、地道な研究がなされてきました。近年の関係史料集の刊行ラッシュはまさに中世豊島氏の復活といった風でした。今回の企画は、そうした最新の研究成果を集約し、資料展示とシンポジウムという形で広く一般の方々に提示し、豊島氏とその基盤であった豊島郡の歴史像を様々な視点から浮き彫りにしようとする試みです。

まず、板橋区立郷土資料館では一〇月一八日より十一月三〇日まで特別展「豊島氏とその時代―中世の板橋と豊島郡―」（入館料二〇〇円）が開かれ、貴重な古文書などが展示されます。引続いて、十一月八・九日には、豊島氏ゆかりの平塚神社そばの滝野川会館で「シンポジウム豊島氏とその時代」が開催されます（参加申込締切一〇月一七日）。当日は多くの新しい研究成果が発表されることでしょう。

そしてトリを飾る当館では写真パネルを中心とした展示「豊島氏とその時代―中世の豊島区―」を十一月一三日から来年二月四日まで開催いたします。興味深い企画が目白押しです。どうぞ御期待下さい。

一九九七年度 第二回収蔵資料展

「開催期間」

「種子屋（たねや）のあゆみ」  
10月7日（火）～12月5日（金）

の「案内」

\*月曜・祝日・第三日曜日休館

豊島区を通る中山道は現在、「とげぬき地蔵通り」として関東近県から参詣にくる「おばあちゃん原宿」となっていますが、明治期から昭和一〇年代頃までは、巣鴨から北区滝野川にかけての中山道は「種子屋通り」と呼ばれ、野菜の種子屋のメッカでした。大正中期には二〇軒以上の種子問屋が軒を連ねており、全国各地の大根・人参などの根菜類や、茄子・胡瓜などの果菜類、小松菜・ほうれん草などの葉菜類といった農産種子の大集散地を形成していました。

その一軒、幕末から巣鴨庚申塚で種子問屋を営んできた榎本留吉商店（現東京種苗株）の五代目榎本泰吉氏から、一九九一年蔵の解体に伴い、膨大な量の種苗関係資料の寄贈を受けました。資料館では、友の会古文書サークルの五名（通称エノモン会）にご協力をいただき、約六年間地道に資料整理を進めてきました。

これまでに整理を終えた資料は約二万点で、全体の半分にも達しませんが、今回「中間報告」という形で（調査も不十分ですが）、榎本家資料の存在と価値を皆さんに知っていただく機会を設けました。



西巣鴨3丁目にある東京種苗株 文化財係提供

明治期から戦前期にかけての豊島区域周辺の種苗業のあゆみをとおして、地域の埋もれた歴史に新たな光をあててみたいと思います。

■種子と農産物

豊島区域周辺は武蔵野台地に位置し、江戸時代から清水夏大根、滝野川牛蒡・人参、駒込茄子、巣鴨小かぶなど主に根菜類の産地として有名でした。明治時代には白菜、キャベツ、玉葱など西洋野菜が導入され、官民あげて栽培技術の向上と品種改良がさかんに行われました。

ここでは、東京府立農事試験場作成の水彩画や蔬菜の生産用具などを展示します。

■カネトのタネ

種子屋の起こりは定かではありませんが、もとは農業の副業として自家生産した種子を往來の盛んな街道筋などで売っていたのが評判となり、種子専門に商うようになったようです。「種子屋通り」

の元祖は、滝野川村の榎屋（榎本）孫八、越部半右衛門、榎本重左衛門の三氏で、字名「三軒家」の由来とされています。

ここに紹介する榎本留吉商店（屋号カネト）は重左衛門の分家で、明治から昭和一〇年代にかけて茨城・長野・千葉な



「蔬菜図解」

東京西ヶ原種苗店・一九一一年より

田中清昭氏所蔵

ど関東を中心に、全国各地に種子のネットワークを形成しました。榎本家資料から「タネの道」を探ってみましょう。

■種子屋の世界

種子は、天候に大きく左右され、また実際に栽培しないと品質の善悪の結果が出ないため、種子屋の商売は採種農家・卸問屋・小売店・行人・生産農家との信頼関係で成り立っていました。また販路を拡大するために、優秀な原種を数多く作り、品評会に出品するなど、絶えず品種改良の努力が必要でした。

ここでは、練馬・板橋地域の種子屋の資料（看板、行商道具、品評会賞状・賞杯、カタログ、相場表）を紹介します。

また、大正五年滝野川町を中心に近隣地域の種子屋約五〇名が組織した東京種子同業組合の活動もあわせて紹介します。

■番外編！大根物語

練馬区域周辺は沢庵用の練馬大根の一産地で、地元の種子屋も大根種子が主要商品でした。しかし昭和初期以降バイラス病や都市化の影響で消滅の危機に立たされ、生産農家も急減しました。近年

では、都市農業が見直され、練馬大根が復活するなどの動きが活発化しています。

■変わりゆく種子屋

戦後、固定種から一代交配種の時代となり、また都市化による農業の衰退により、零細な個人経営の種子屋は廃業したり、不動産業や園芸店に変わっていきました。現在では資本力のある大手種苗会社によるバイオテクノロジーを駆使した品種改良が主流となっています。

【展示説明会】

10月25日（土）・11月22日（土）  
両日とも午後2時～。展示室に集合。

【地域史講座】

「種子屋と大根の歴史をたずねて」

- ① 10月23日（木）オリエンテーション
- ② 10月30日（木）「種子屋通り」を歩く  
（巣鴨～北区滝野川約6km）
- ③ 11月6日（木）「大根街道」を歩く  
（練馬区地域約6km）

- ◇時間：全回とも午後1時～4時
- ◇場所：①区立勤労福祉会館第3会議室
- ◇定員：三〇名（10月15日～電話受付）
- ◇参加費：三〇〇円

# 一九九七年歴史講座 「アジア太平洋戦争とアジアの独立」から

アジア太平洋戦争の開始によって、多くのアジア諸国は日本の占領下におかれました。日本の敗戦後、それらの諸国の大部分は植民地から脱して独立国となります。日本の起こした戦争はアジアの独立にどのような役割を果たしたのでしょうか。また、アウンサン、ボース、スカルノら独立運動家と日本との関わりはどんなものだったのでしょうか。

こうしたことをテーマに、今年度の戦争を考える講座は「アジア太平洋戦争とアジアの独立」と題して次のように開催されました。

- ◎七月二六日・八月二日 講義「アジア太平洋戦争とアジアの独立」(講師：青木哲夫へ当館学芸員・法政大学講師)
- ◎八月九日 ビデオ上映「ビルマ戦記」(一九四二年)「イムパール作戦」(一九五〇年)(解説：伊藤暢直へ当館学芸員)

講座には約四〇名の方が熱心に参加さ

れました。寄せられた御感想のなかの一部を掲載させていただきます。

◇まさに自分の少女時代の体験を半世紀後にあらためて追体験できました。ただ、この愚かとも思える歴史の流れは、戦中派には、身にこたえてわかるのですが、これを次代に如何に伝えるかが問題だと思えます。(七〇歳代・女)

◇いままで中国や朝鮮については本や経験者を通じて知識を得ていたが東南アジアの国々については知らないコトが多かったので勉強になった。(三〇歳代・女)

◇小生その時は海軍に勤務し終戦を迎えて居りましたが。頭のテッペンからツマ先まで軍国日本にかぶれていて外を見る目・耳・頭を持っていませんでした。従って今回受講して自分の生涯の部分で空白になっていた部分が埋めることができて大層満足して居ります。(六〇歳代

・男)

◇幅が広く二回の講座ではもの足りない

気がしたが、今後の学習するヒントにはなった。(四〇歳代・女)

◇①たいへんよい企画であった。②功罪論をもう少し突込んで欲しかった。③出席者の発言を引きだす試みがあってもよい。(六〇歳代・男)

◇日本が侵略戦争を起こした原因をもっとはつきり講座に盛り込むべきである。(六〇歳代・男)

\* \* \*

講義で使われた資料のなかから一点。開戦直前一九四一年一月の大本営政府連絡会議決定「南方占領地行政実施要領」の末尾には日本側の独立運動対策として次のように書かれています。

現住土民に対しては皇軍に対する信仰観念を助長せしむる如く指導し其の独立運動は過早に誘発せしむることを避くるものとす

〔青木〕

## 連載 一点の資料から

### 《番外編》

## 木樋 (もくひ)

「一点の資料から」とはいいながら、普段の資料の紹介記事とは少し趣向を変えたいと思います。

今回の話題は、郷土資料館の収蔵庫に保存されている三本の木樋（木製の水道管）についてです。これら三本の木樋は実をいいますと謎（？）につつまれているのです。

これらの木樋はいずれも千川上水（用水）に使用されていたという情報がありますが、はなはだ不明確なものといえます。一方、これらの木樋のうち、一本は南長崎六丁目の高木さんというお宅からご寄贈いただいたもので、残りの二本は区立第十中学校（千早四丁目）の校庭から出土したものであるとされています。いずれも旧長崎村内に位置します。

ところが、千川上水の旧長崎村を流れていた部分は素掘り（地面を掘り下げただけの水路）の状態でした。したがって木樋を使う必要がありません。また、こ

の付近が暗渠になったのは一九五〇年代ですから、まさかその時代に木樋を使うわけがありません。というわけで千川上水に使用された木樋であると言うことは不思議なことなのです。

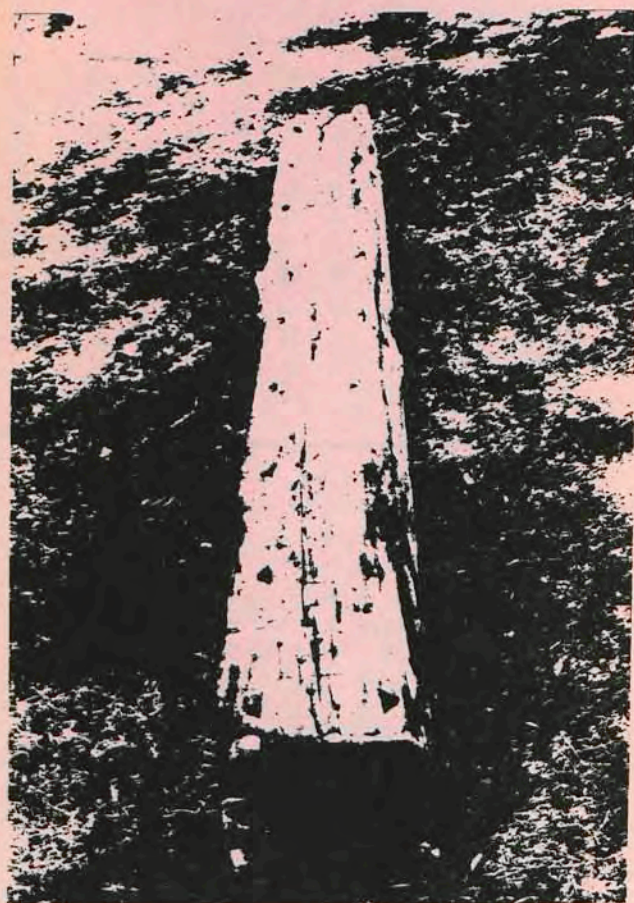
では、千川上水とは全く無関係のものなのでしょうか。

高木さんから寄贈を受けた木樋は千川上水と関連がありそうです。高木さんの家の前には千川上水から分かれて葛ヶ谷村（現新宿区）に給水する分水が流れていました。この分水は高木さ

謎（？）につつまれた第十中学校の木樋

んの家の前の付近で通りを横切っていたので、その通りの下を通すための管だったのかも知れません。

〔伊藤〕



郷土資料館なんでもQ&A

Q：雑司ヶ谷霊園には、なぜ、ケヤキの

ように大きい木が繁っているんですか？

A：まず、霊園がつくられる過程をみて

いくこととします。今の霊園の面積は、

一〇六、一一〇㎡ですが、最初からこの

広さではありませんでした。霊園の北西

の部分（現在の面積の三分の一から四分

の程度）は、幕府の御鷹部屋があった

場所でした。明治政府は、一八七二（明

治五）年、そこを神葬地と決め、雑司ヶ

谷出町墓地としました。そこを発端にし

て墓地の範囲を南へ拡大していくのです

が、そちらの方には、農業を営む人々の

家と耕作する畑が広がっていました。

一九〇二（明治三四）年、その一帯（

高田村大字雑司ヶ谷字中島御嶽と大字雑

司ヶ谷町の一部分）を、当時の東京市が

買い上げ、墓地として造成していきまし

た。つまり、次第に拡張して現在の広さ

にしたのです。

この霊園の拡張計画により、各家は移

転を余儀なくされ、現在の霊園の周辺に  
移りました。しかし、個々の家の庭にあ  
った大きな木や屋敷林は伐採せず、墓地

の造成計画のなかに組み入れられました。

霊園のケヤキは、このような経過のなか

で成長してきたものなのです。移転した

家の子孫の間では、「今の家の大黒柱は

霊園の中の自分の屋敷のケヤキで作った

とか「ケヤキが並ぶ様子から先祖の屋敷

の範囲がわかる」というように伝えられ

ています。ケヤキは、その土地の記憶を

伝えるため、今日も枝を思いっきり伸ば

しているのです！

以上のことを地図で確かめたい方には、

次の地図類が参考になります。区内の各

図書館の郷土資料コーナーで閲覧できま

すが、郷土資料館で頒布もしていますの

で、どうぞご利用ください。 「福岡」

\* 『豊島区地域地図』第四集（明治四

二年から昭和三十一年までの一万分の

一地形図七枚と解説冊子）八〇〇円

\* 『豊島区地域地図』第五集（下高田

村と雑司ヶ谷村の近世の村絵図と解説

冊子） 一、五〇〇円

編集 後記

文化の秋を迎え、当館には各  
地の博物館・美術館から郵送され  
てくるポスターが多くなってきました。

これらポスターは、その  
つど館内に掲示してありますが、そ  
の年の展示傾向を知る材料にもな  
っています。発掘による最新情報

の提供、地元出身の美術家の作品  
展示、マチの変遷を地図から読み  
取るといった傾向がみられます。

当分、特別展を開くことができ  
ない当館では、半分うらやましい  
気持ちでポスターをながめること

もあります。といって、展示室の  
展示資料が変わっていないかとい  
えばそうではありません。今年度

の試みとして、二、三ヵ月単位で  
展示を変える収蔵資料展を行って  
います。寄贈していただいた資料

を中心に、小規模ですが、身近な  
まちの歴史を各方面からとらえた  
内容で開催しています。どうぞご

来館ください。 「福岡」

かたりに  
No. 47  
1997年9月25日  
豊島区立郷土資料館  
豊島区西池袋2-37-4  
電話03-3980-2351  
豊島区広報印刷物  
L30-09-076